

川崎大師の石造物調査と体験型学修プログラム

国際日本学部 角南聡一郎

川崎区誌研究会との出会いは、2021年度の民俗調査実習で川崎大師（金剛山平間寺、真言宗智山派大本山）所在の石造物の見学を計画した際に、何か参考となる文献はないか調べたことに始まる。検索の結果、同会の石造物調査部会の一員である金井晃先生を中心として、2008年から2011年にかけて境内石造物調査がなされ、2014年に報告書が刊行されていることを知った（金井晃ほか2014『川崎大師石造物調査報告書』川崎区誌研究会）。そこで、同会会長の小泉茂造先生に電話連絡をし、報告書の入手方法と民俗調査実習へのご協力をお願いした。そして、11月7日に小泉・金井両先生に川崎大師の石造物をご案内いただいたのである。

川崎大師で、両先生に今後の角南ゼミの学生と川崎区誌研究会との交流の可能性について、相談をさせていただいた。金井先生によれば、前回の報告書に収めきれなかった資料や石造物の移動などがあり、補遺編を作成したいという考えがあるとのことであった。同会は長く郷土川崎について調査してこられた、シニア世代が



川崎大師での現地調査の様子

中心である。しかし、同会の活動は、近年のデジタル化の波には十分に対応できておらず、コロナ禍で活動は休止中であるという。一方で大学生には調査研究の経験は未だないものの、デジタルネイティブ世代として教員やシニア世代よりもはるかに、デジタル化社会に適応して情報の整理や発信をするリテラシーが備わっている。これら異なる世代が、同じ対象について調査をおこない情報を蓄積するということは、相互補完的関係となりうることで、協力して調査報告書を作成することが、可能となるのではなからうかと考えた。

金井先生は、これまで多くの石造物調査を実施し、成果を公表してきた在野の研究者である（金井晃1980『倉淵村の道祖神』金井道祖神研究所、金井晃1982『神奈川県道祖神調査資料集1』金井道祖神研究所、金井晃1985『鶴見石工の系譜』『日本の石仏』33 pp.51-60など）。金井先生にご案内いただいた民俗調査実習履修生2名が、2022年度より角南ゼミの所属となった。両名は実習で習得した調査方法を参考としながら、自らの研究テーマに取り組んでいる。こうした結果からすれば、学生たちは金井先生の詳細で熱のこもった石造物の解説に、心を打たれたのではないかと思われる。

2021年度から神奈川大学「体験型研修」の新規プログラムの開発に伴うプロジェクトがスタートし、角南はこれに参加している。2023年度を目標に共通教養科目の一つとして「体験型研修」の授業を開講すべく、石造物関係の授業準備をおこなっている。石造物を対象とするのは、調査を通じて地域の歴史や文化を知ることができること、他の文化財と比して石造物が調査しやすいことなどがあげられる。そこで角南ゼミ

ナールでは2022年度より、金井先生にご指導を仰ぎ、「体験型研修」の新規プログラム開発の予備的作業も含めて、川崎大師石造物の補遺調査を実施することとなった。我々からの調査のお願いに対して、川崎大師は快く許可してくださった。

2022年6月11・12日から土日などを利用して、角南とゼミ生は金井先生とともに調査を開始した。期間は1年間を予定している。当日は、NPO法人かわさき歴史ガイド協会の副理事長藤田智恵子氏も参加された。同協会は現在、川崎大師境内の歴史ガイドを担当されている。藤田氏からガイドする際に、境内石造物のガイドブックのようなものがあれば便利だという話題が出た。報告書が刊行されれば、それをもとにガイドブックを作成することも可能ではないかと考えている。この調査を契機として、文化財調査に留まらず、その活用も視野に入れてゼミ活動を進めていきたい。いずれにせよ、金井先生をはじめとして、協会の皆様、川崎大師の皆様にお世話になりながら、調査を継続していく予定である。

国際文化交流学科観光文化コース 演習「ことりつぶ」

―軍港・横須賀を“観る”―

国際日本学部 国際文化交流学科 3年
(高井ゼミナール) 春田 菜々美・

石塚 あかり・波辺 真由・酒井 那実

【はじめに】

国際文化交流学科観光文化コースでは2年次の「コース演習Ⅰ」で「ことりつぶ」と称したフィール